

ラブ

2006(平成18)年8月14日鑑賞(東宝試写室)



監督=大谷健太郎/脚本=金子ありさ/原作=あだち充『ラブ』(少年サンデーコミックス刊)/出演=長澤まさみ/速水もこみち/阿部力/石田卓也/高橋真唯/黒瀬真奈美/市川由衣/八嶋智人/田丸麻紀/徳井優/松重豊/渡辺えり子(東宝配給/2006年日本映画/106分)

……『タッチ』(05年)に続き、長澤まさみを起用してあだち充の原作コミックが映画化された。2人の男性間で揺れ動くヒロイン像は同じだが、野球より水泳の方が、「東宝シンデレラ」の美しい水着姿を拝めるだけラッキー……。そんなエロオヤジ的評論は別としても、ちょっと無理な設定が目につくのは、私だけ……？ 果たして、『NANA』(05年)、『電車男』(05年)に続く、3匹目のドジョウはいるのだろうか……？

いくらコミックでも「人殺し！」は不穏当……？

この映画は、高飛び込みの選手である二ノ宮亜美を演ずる長澤まさみと競泳自由形の選手である大和圭介を演ずる速水もこみちの2人が主演する青春ドラマ。しかし、ストーリーの組み立て上、当初は亜美と圭介を仇同士にする必要があるため(?)、2人の出会いは、亜美から圭介に対する「人殺し！」というセリフになる……。

ちょっと鈍い(?)圭介は、これに対して「ハア……」と不思議がるだけだったが、この「人殺し」というセリフの背景には、遠く「にのみや」VS「やまとや」の菓子づくりをめぐる闘いがあった。その闘いに敗北し、無念の死を遂げた「にのみや」の祖父の血を受け継いだ二代目二ノ宮憲次郎(松重豊)やその娘の亜美は、今でも「やまとや」を仇と思っているらしい……。

しかし、圭介としては、そんな祖父の時代の争いをいまだに根に持たれ、「人

殺し」呼ばわりされたのではたまったものではない。いくらコミックでも、また物語の設定上ロミオとジュリエットばりに仇同士にする必要があるといっても、このセリフはちょっと不穏当では……？

『タッチ』に続くあだち充の原作だが……？

『ラフ』は不朽の名作(?)『タッチ』に続くあだち充の作品で、1987年から89年にかけて週刊少年サンデーに連載され、累計1500万部の大ベストセラーになったとのこと。もちろん、私は『タッチ』と同様に全然読んだことがないが、映画を観ている限り、ストーリー設定に少しムリがあるのでは……。

まず第1に、祖父の時代におけるお菓子づくりをめぐる闘いの話も、「にのみや」の孫娘の亜美は今もその恨みを引きずっているのに対し、「やまとや」の孫である圭介はその話すら全然知らない。しかしこの設定は、少しヘン……？

第2に、亜美が「お兄ちゃん」と呼んでいる、競泳自由形の日本記録保持者である仲西弘樹(阿部力)と亜美との関係もちょっと不自然……？

第3に、若者たちの青春群像劇の拠点は、東海林茂子(渡辺えり子)が管理人をつとめる上鷲寮だが、今ドキ「女が2階、男が1階」で集団生活をするような寮なんてあるの……？

そして第4に、交通事故で重傷を負い、やっと歩行練習を開始したと思った仲西が見事に復活し、次の大会でまた優勝というのはあまりに無茶……？

『ラフ』とはどんな意味……？

この映画では、上鷲寮の管理人である茂子が若者たちのお母さんの存在だが、この茂子が寮生たちに語って聞かせるのが、『ラフ』の意味。それには、「どんな見事な絵もまず最初は、ラフな下書きから始まる。これから何本も線を重ね、下書きを繰り返し、その中から自分自身で一本の線を選び出す。荒削り……大ざっぱ……」という深い意味があるらしい。そしてそれを象徴するかのよう、ラフなスケッチをしている茂子の娘、東海林緑(黒瀬真奈美)が登場するが、これもちょっと不自然……？

野球よりも水泳の方が……？

「東宝シンデレラ」の長澤まさみは、『タッチ』（05年）では双子の高校球児をめぐって揺れ動く乙女心をうまく演じていた（『シネマルーム8』196頁参照）が、今回は「お兄ちゃん」と慕う仲西とそのライバルになる圭介をめぐって揺れ動く乙女心を「熱演」している。

その点は両作品とも同じだが、大きく違うのは『タッチ』は野球がテーマだから、長澤まさみの服装は「普通」だったのに対し、『ラフ』での長澤まさみは高飛び込みの選手だから、「東宝シンデレラ」の長身でバランスのとれた美しい水着姿を再三拝むことができること。多少エロオヤジ的評論になるかもしれないが、そりゃやはり生ツバもの……？

心を打つドラマと緊張感はライバルの存在から……

大鵬に柏戸がいたように、長嶋に王がいたように、心を打つドラマと緊張感はライバルの存在によって生まれるもの。したがって、脚本を書くにあたってその点を強調するのは当然。

もちろんこの映画が描くライバルは、競泳自由形の日本選手権を競う仲西と圭介。しかし他方、圭介と同室の親友で高飛び込みのエースである緒方剛（石田卓也）や秘かに圭介に対して恋心を持っている高飛び込みの女子日本チャンピオンである小柳かおり（市川由衣）が登場することによって、競泳と恋の両面におけるライバル関係をうまく浮かび上がらせている。

また、競泳顧問であるお調子モノの古屋武人（八嶋智人）や、高飛び込み顧問である美人教師、咲山信子（田丸麻紀）の存在も、圭介や亜美の気持の安らぎとなっているはず……。さてそうなると、ずっと「お兄ちゃん」を応援していた亜美は、いざ2人の最後の対決となった時、どちらを応援するのだろうか……？

柳の下に3匹目は……？

『NANA』と『電車男』は2005年を代表する大ヒット作で、興行収入は合計80億円に迫ったとのこと。その『NANA』現象を起こした大谷健太郎監督と『電車

男』現象を起こした金子ありさ（脚本）が組んで、あだち充の原作を映画化したわけだが、果たして柳の下に3匹目のドジョウはいるのだろうか……？

長澤まさみの次回作に期待

長澤まさみ主演の『タッチ』は12億円の興行収入をあげたし、この『ラフ』も一定の興行収入はまちがいなさそうだが、どうも私は彼女をこのように単純な(?)青春ドラマで使うのはもったいないような気がしてならない。

宮崎あおいが若手演技派女優のピカ一的存在として成長しているのは、『好きだ、』(05年)、『初恋』(06年)、『ただ、君を愛してる』(06年)などのいい作品に恵まれたおかげ。時々観るNHKの朝ドラ『純情きらり』でも、彼女の熱演は光っている。

これに対して、『ただ、君を愛してる』で共演した若手美人女優の黒木メイサは、『同じ月を見ている』(05年)、『着信アリ Final』(06年)にも出演しているが、作品の出来においても彼女の存在感においても、どうもイマイチ……？

それと同じように、長澤まさみも『タッチ』や『ラフ』では高校生役という等身大の役をうまくこなしているのだが、ただそれだけ……。やはり彼女には、日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞した『世界の中心で、愛をさけぶ』(04年)のような、演技力が要求される役を与えたいもの。

そんな彼女の次回作は9月30日公開の『涙そうそう』だが、さてそこで彼女はどんな「大人の演技」を見せてくれるだろうか？ この次回作に大いに期待したいものだ。

2006（平成18）年8月15日記